

氏　名（本籍） 陳　慧慧（中国）

学　位　の　種　類 博士（学術）

学　位　記　番　号 甲第68号

学　位　授　与　の　日　付 平成26年3月20日

学　位　授　与　の　要　件 学位規則第4条第1項該当

学　位　論　文　題　目 中国国有企业改革的评价及制度因素分析

論　文　審　査　委　員
主査 愛知大学教授 高　橋　五　郎
副査 愛知大学教授 唐　　燕　霞
副査 愛知大学教授 加々美　光　行

審査の結果の要旨

本論文は中国経済が一時の勢いを失いつつあることを意識したうえで、その構造改革の一環として国有大型企業の現状分析を試みたものである。モチーフは、中国経済体制改革には中国の国情を尊重する必用があるが、その中心的ポイントが依然として紆余曲折を辿っている国有大型企業改革であるという点に立脚している。申請者の問題認識は国有大型企業の独占的性格を政府が調整できるかどうかがカギを握っているというものだが、その認識に立った議論を進めていくための前提として国有大型企業の経済学的な分析を行っている。

その中心にはいくつかあり、全要素生産性（T F P）、生産性変化、産業及び市場構造、独占と競争関係である。このうち最も重要な分析は全要素生産性分析である。したがってこの点を中心に審査結果の概要を述べる。

本論文は定性、定量の組み合わせに依る国有大型企業改革の方法論的斬新性が認められ、その意味で先行研究の弱点を補い、国有企業改革の進捗状況という時間的評価のみならず、研究を通じて先行研究の仮説を検証している点が評価できる。本論文で参照したデータは主に「中国統計年鑑」「中国工業経済統計年鑑」「中国環境統計年鑑」である。

全要素生産性分析に於いては、時間と成長の効率性を分析するマルムキスト（Malmquist）生産率指數分析（動学的な技術進歩計測値分析。効率性を時間比較する方法）を多用し、2001から2013年までの期間について国有大型企業36業種のT F Pをはじめとする各種指標を分析したことは斬新であり評価できる。Malmquist 生産率指數の考え方と計算式は本論文52ページの脚注にFare etcの式として掲載されており、本論文はこの難解な理論の組み立てを十分に理解し、応用していることが随所で確認できる。

実証分析では産出をG D Pのみ、G D P + S O2の二種類とし、投入を資本、労働とし、産出がG D Pのみ、G D P + S O2の場合のT F P、技術進歩、技術効率変化、純技術効率変化、規模効率変動の指數を算出して比較した。計算結果は必ずしも明確に判断できるとは言い難いが、双方ともT F Pが1を超える、国有大型企業がT F Pの成長、技術進歩、効率性の面では改善されている、しかし技術進歩変化、規模効率変動は下降している、36業種の中には期間、指標によって差があり国有大型企業をひとくくりにした議論はできない、などが明らかになり国有大型企業改革の業種別対応、独占の公共的調整の対応が必要である点をこのデータ分析の面から明らかにした。

本論文について、審査委員会の席上出された主な意見は次の通りであった。

- 1、本論文の執筆者は在学中、国有企業改革に関する論文、分析ルールとしての計量分析（全要素生産性分析など）に基づく経済分析論文を発表してきた。本論文においても、これらの蓄積が効果的に利用されている。研究課題、研究方法にはい感性が確認でき、本論文はそれら既発表論文の成果を踏まえた成果といえる。
- 2、国有企業改革あるいは企業研究のあり方に、新しい方法的可能性を切り開いた点

は評価すべきである。

- 3、研究の組み立て方は明瞭だが、中国文化や伝統といった、経済学にとって周辺に位置する部分に意識が分散している点がみられ、研究範囲がやや広くなっている。
- 4、国有企業改革研究には多くの実績があるが、それらの多くは定性分析に重点がおかれたものが多かった。本論文の特徴は、定性分析に加え、重点的に定量分析を行っている点にある。
- 5、ただし、この両面からの分析の相互関連性が明瞭でない点があるのではないか。
- 6、一般的にみられる国有企業改革の論点は、時間の推移とともに変わっている。本論文はその変化を認識し、着目した分析を行っている点はこれまでの国有企業分析にない特長である。
- 7、定量分析の結果、国有企業改革の効果や課題をいかに評価するかという点にやや詳細性に疑問がないではないが、研究の全体的手手続きには問題はない。
- 8、定量分析に利用した統計資料から、分析の対象となる母集団はどのように特定したのか疑問もあるが、論旨に影響はない。
- 9、変化する国有企業形態には、そのときどきの研究において、国有企業の定義をどうするかという問題があるが、この点が詳細に述べられていない。
- 10、Malmquist 生産率指數分析の意義と方法を理解し応用しているが、Malmquist 分析による期間分析のみならず、現状分析もあってよかったです。

以上から、本審査委員会は一致して、本論文が博士学位（学術）を授与するに値するものと判断した。

以上